

# 中国経済学の父 孫冶方 (スン・イエファン 1908-1983)

福 光 寛

## 目 次

はじめに

出生からロシア留学まで 1908-1925

ロシア留学と江浙同郷会事件 1925-1930

帰国そして党を離れ農業経済調査へ 1930-1937

抗日文化活動 1937-1941

劉少奇との出会い 1941-1944

華中局から華東局へ 1944-1949

上海から北京へ 1949-1957

経済研究所所長としての奮闘から逮捕まで 1957-1968

独房7年 出獄してから死去までの7年 1968-1983

## はじめに

中国経済学の父とされる孫冶方（スン・イエファン 1908-1983）について、末尾の文献に示したように1980年代に若干の日本語での紹介があるが、私を知る限りでは日本の経済学者は孫冶方にほとんど関心をもたずに今日に至っている。ところで1980年代と今日を比較すると、使用できる中国語情報ソースは多様化しており、私たちは多くの中国語文献を時差なく入手できるようになっている。その今日の視点で、彼の評伝を書き直し日本語の評伝を日本のアカデミズムに提供することは意味があるのではないかなにより彼が中国の経済学者から受けている尊敬を理解することは、日本の経済学者が中国を理解するうえで、本当は最初に必要な知識かもしれな

い。私たちが依って立つ日本の状況は、中国の経済学者とは当然異なるが、彼が中国の経済学界において尊敬されている理由を、私たちなりに理解することが必要である。以下が彼の略歴である。

孙冶方の元の名前は薛喆果(シュエ・エーグオ)、孙冶方は筆名が通称となったものである。このほか偽名(化名)として宋亮、孙宝山、叶非木、勉之などを用いた。1908年江蘇省無錫(ウーシー)の玉祁鎮(ユーチーチェン)に生まれ、1983年に北京で病気のため亡くなった。1925-1930年の間、ロシアへの留学歴があるほか、1934-35年、日本に在住したことがある。なお孙冶方には3人の兄がおり、二番目の兄の薛明劍(シュエ・ミンチエン 1895-1980)は著名な民族資本家。また孙の父はかつて無錫榮氏の家族企業の仕事をしていた。孙冶方は、新中国建国後、統計局副局長、科学院経済研究所長を務めた。価値規律を重視する学説は、計画経済を軽視するものとの批判を浴び、政治犯として独房に収監された。しかし説を曲げることなく7年後に釈放された。孙冶方の名前を冠した孙冶方経済科学賞は1985年に開始。毎年選考され、その受賞は中国経済学界で最高の荣誉とされている。なお無錫礼社鎮(リーシェチェン)生れの経済学者薛暮橋(シュエ・ムーチアオ 1904-2005)は遠い親類である。

## 出生からロシア留学まで 1908-1925

孙冶方(薛喆果)の父薛华閣(シェエ・ホアゲー)は、もとは無錫北部の有力な一族の一員であったが、彼が家業を継いだときには、一族はすっかり没落していた。なお40余亩の田(圩田)を所有していたが、経営も悪くほとんどの年はこれという収穫もなく、ただ他人の店の手伝いをするほかなく、のちに無錫の榮家の紡績工場(紗厂)の事務員をするようになった。母の孙氏は無錫鼎石塘湾の贡生(推薦を受けて首都の最高学府で学んだ人)孙立甫(スン・リーフ)の娘。字を理解し(识字断字)近隣同胞を助ける善人として知られた(邓加荣 77, 195; 斯非知 8-9)。

孫治方（薛喆果）の父は事務員で給料も安く、子供たちに勉強させるお金がなかったが、幸い友人に江南一帯で有名な画家吳靄岱（ウ・グアンタイ）がいて、喆果（エーグオ）が聡明で、埃実（チースー）学堂の試験を受けて学ぶことを希望することを知り、試験に受かったら費用をみると言ってくれた。そこで喆果は1921年に受験して学堂に入学することができた（鄧加榮 195-196；斯非知 27）。

この埃実学堂で入学の翌年1922年に出会った教師の張效良（チャン・シアオリアン）は建党初期の共産党員だった（中国共産党がコミンテルン：第三インターナショナルとも呼ばれる国際共産主義運動組織の指導のもと、上海のフランス租界で結党大会に当たる第一次全国代表大会を開いたのは1921年7月）。そして翌1923年秋、張效良の紹介で孫治方を含む6人が社会主義青年団に加入した。張效良は病のため故郷に帰るにあたり、上海の党委員会に対し孫治方を青年団書記に推薦した。そして張效良の代わりに建党初期から活動に従事している董亦湘（トン・イーシアン）が青年団の指導のために派遣された。そこで、孫治方は董亦湘と長い時間話すようになった（鄧加榮 196-200；斯非知 28-31）。

1923年末、上海で開かれた中共中央第三次代表大会で、国民党との合作（第一次国共合作）が決定され、共産党員と社会主義青年団は国民党に加入すること、国民党の組織がないところでは、共産党組織をつくることになった。こうした状況のもとで上海の党委員会は、無錫についてはまず共産党の基礎組織をつくることにした。そして孫治方が率いる社会主義青年団の組織、思想が堅固であることから、そのメンバーが共産党員の資格を満たしていることを認めた。翌1924年3月、6人を共産党員として中国共産党無錫支部が成立、孫治方は書記に選出された。このとき彼は16歳だった。なお1924年に中国国民党にも入党している（鄧加榮 198-200）。

1924年秋、埃実学堂を卒業した治方は、公益工商中学そして梅村中学の2つに合格。革命活動の便のため公益工商中学に進学する。公益中学は実

業家の榮徳生(ロン・ドシエン)が経済人、技術人を養成するため開学した学校で、設備科目も整い、修学期間は4年。彼の軸足はすでに革命活動にあったが、この中学が好きだったとされる(鄧加榮 200-203; 斯非知 31-33)。

## ロシア留学と江浙同郷会事件 1925-1930

1925年9月、コミンテルン別名第三インターナショナル(国際共産)は孫文を記念して、モスクワに中山大学を開設。中国革命を支援するため、同大学で将来の幹部を養成するとして、人選を中国共産党に求めた。その人選の結果、モスクワ行きが決まったことが孫治方に伝えられた(鄧加榮 75-78; 斯非知 34-39)。

留学が決定した若者は中国各地から9月下旬に上海に集められた。そして10月下旬、船でウラジオストックへ。数日の滞在のあと、そこから20日あまりかけて汽車でモスクワに送られた。一緒に行ったものに張聞天、劉少文、董亦湘、烏蘭夫、王明など。王明は事務を執るために入ったもので、留学生としての派遣ではなかった。また別途加わった中に、蔣経国、邵力子、楊尚昆らがいる。中山大学が受け入れた数は1925年末で148人になった。内共産党が103人。国民党員は30余人。1926年にも国共両党は継続して学生を派遣し、学生数は200人余りに達した。その中には欧州支部から派遣された鄧小平が含まれる(鄧加榮 79-83)。

当時ソビエトロシアの経済は決して余裕はなかったと思われるが、留学生の衣服靴から学習用品、飲食まで手厚く保証されたとされる(鄧加榮 83-84)(1920年代半ばのロシアでそれなりに経済システムは運営されていたとみるべきかもしれない)。

ところでテレビ番組「価値規律第一」のなかでナレーション(解説詞)は、当時、スターリンの高度中央集権的計画経済体制と、ブハーリンの自由市場競争経済体制とが競っており、この両者間の選択の問題は孫治方の思想に影響を与えたと指摘している。両者の対立は、ロシア革命のあと取

られた工業の国有化などの急激な共産主義政策で国内経済が疲弊したことに対して、1921年3月から取られた新経済政策＝ネップをめぐるもので、このネップでは食糧税を納税したあとの農産物の流通を認めるなど、市場の部分的復活が認められたとされる。このネップの継続をめぐり活発な論戦が交わされていた。この1920年代後半のネップ経済の時期（そしてそれが解体する時期）のソビエトロシアに孫治方は留学して、おそらくネップをめぐるさまざまな論争を見聞していた。そのこと自体に、中国の社会主義社会の在り方を考える上で詰めるに値する点が多くあるので、論点を表1と表2にまとめた。

表1 ネップをめぐるスターリンとブハーリンを形容する用語

ネップ終息急ぐスターリン	ネップの継続求めたブハーリン
国家機関への過度の依存 計画による工業化 官僚主義 無味乾燥な正統主義 急速な重工業化 農業の停滞 農業からの収奪 作られた飢餓	計画と市場の結合 漸進主義 社会的多元主義 自身の利害に基づく協同組合への参加 小農民の利益擁護 農民の蓄積重視 時間をかけた社会主義化

資料：下斗米(1978)、小山(1981)、山野(1989)から作成

表2 ネップは何を意味するのか

1920年代 ネップの時期	1930年代 ネップ解体の時期
小農民の不满による農業生産の停滞が契機 個人農業の安定 小農民との長期共存 通貨価値の安定 流通協同組合の重視	1929年大恐慌が契機 人口の圧倒的多数を占める小ブルジョア農民 集団化によるクラーク（個人農）消滅 生産共同組合の重視
食糧徴発制を食料税（物納）→金納に切り替え→農業生産回復へ	集団買付→義務納入へ 食糧生産停滞 都市は物資不足 切符配給制度へ
労働力の雇用 土地生産手段賃貸借の一定の由化 自由商業・私的セクターの許容 企業に価格販売の決定権 商業計算の原則 節約合理性による利潤獲得の義務化	大量集団化 自由市場の消滅 私営商人の非合法化 供給販売の中央集権化 労働組合の変質、国家機関化

資料：上島(1973)から作成

他方、猛烈な努力の末に孫冶方は理論とロシア語の両面で同窓生がうらやむほどの高い水準に到達した。1927年夏卒業後、多くの者は帰国したが、モスクワ東方労働者共産主義大学中国部でレオンチェフの政治経済学の講義と通訳(翻訳)を依頼される。当時通訳にあたったのは彼のほか烏蘭夫(ウー・ランフ)の二人。その後、東方大学中国部は中山大学と合併される。孫冶方たちは中山大学に戻りソ連教師の通訳を引き続き担当した(邓加荣 84-86, 91-92; 価値規律第一解説詞)。なおス非知(スー・フェイツー)はロシアでの学習内容を、歴史、哲学、政治経済学、レーニン主義、軍事科学などとしており、政治経済学ではロシア語で資本論を反覆して読んだが、ドイツ語で原書を読まなかったことが終生の後悔になったとしている(ス非知 58-62)。ロシア語版で理解したことで正しくマルクスを理解しているか、彼自身詰め切れなかったとしても不思議ではない。

この孫冶方たちの生活を脅かしたのは、この大学内で政治闘争を企てた王明(ワン・ミン)の動きである。王明は中山大学での主導権を、自分より古参の黨員と争っている面があった。その争いに孫冶方が直接巻き込まれる。孫冶方は通訳をしていたので毎月100ルーブル近くの収入があったが、一般の中国人学生や教員はロシア政府から出る小遣いも限られていた。そこでそれぞれが酒や肉をもちより、孫冶方主催で彼の部屋で宴会となり、そこに古参の黨員も集まった。これを耳にした王明は、これを反党セクト主義「江浙同郷会」として中共中央書記の向忠發に報告に及んだのである。またたまたま1928年6月モスクワで開催されていた中共第六次代表大会に乗り込み、党中央に対し「江浙同郷会」への態度を明確にするように迫ったのである(邓加荣 87-97; ス非知 62-80)。

正式にコミンテルンと中国共産党の連合監察委員会が組織されて調査したが、結論として「江浙同郷会」は存在せず、ただの飲み会があっただけとした。この時、モスクワにいた周恩来は監察委員会を代表して、中山大学を訪ね全校集会を開いて調査結果を報告している。しかし王明たちはあ

きらめなかった。1929年から1930年にかけて、反トロツキーの動きが高まりトロツキー派と目される人を排除する機会がくるとモスクワに残る孫治方を王明自身が作ったトロツキー派名簿に入れて排除しようとした。孫治方は監察委員会の審査は再び切り抜けたものの、トロツキー派に対する警戒が足りないと判定され嚴重警告処分を受けて帰国を命じられ、国内革命闘争で検証を受けることになった（鄧加榮 98-109）。

### 帰国そして党を離れ農業経済調査へ 1930-1937

1930年9月帰国。上海人力車夫ストライキ委員会主席、未雇用および再雇用（末几又改任）人力車夫総工会準備（筹备）委員会主席に任ぜられた。同年末上海東部地区（沪东区）労働者（工人）連合会（联合会）準備委員会主席を担当。なお帰国したときの中国共産党は、李立三の左傾機會主義の支配下。政権をとるため各地で武装蜂起を企て、自身と違う考えのものには右傾機會主義として排除する気風が広がっていた。党に対する弾圧も強まっており、密告による逮捕者も相次いでいた。このような状況のなか、江西省書記であり政治局常務委員として中国に戻っていた王明は、孫治方と党との連絡を絶ってしまう（鄧加榮 109-119）。

そうした中、たまたま孫治方は、中山大学で同窓だった周天僂（チョウ・テエンルー）に出会って話し込んでしまう。問題は、周天僂は上海市党委員会の機関紙『上海報』の編集をしており、密偵に見張られていたことである。こうして1931年の夏、彼は初めての逮捕と、拘置生活を味わう。彼の出獄手続きを行ったのは、同郷の錢俊瑞（チエン・チュンルイ）である。彼は陳翰笙（チェン・ハンシェン）博士のもとで農村経済調査を行っている人物（鄧加榮 119-121）。この逮捕釈放の間に何があったかは謎となっている。斯非知は民族資本家として成功していた次兄の学明劍が、釈放に向けて陳翰笙との間を仲介したという仮説を述べている（斯非知 121-126）。

彼は短期間で解放されるが、上海の党組織は、逮捕出獄したものとの連

絡を絶つという規則の問題もあり、彼との連絡を回復しなかった。彼の方は一貫して党との連絡の方法を模索しながら、陳翰笙のもとで農村調査に加わる貴重な経験を積み、実際に多数の調査報告も書いている。その後1934年の春、陳翰笙は日本の東洋文庫の招きで東京に赴き、東洋文庫の研究員になっている。これを追う形で1934年6月に彼は海路日本に向かい東京雑司ヶ谷に滞在している。党との連絡が回復しない中での東京生活は、彼にとって苦しいものだったようだがその詳細も不明である。1935年秋に陳翰笙は帰国。ほどなく孫冶方も帰国している。1935年に新知書店と中国経済資料室を開き、『中国農村』を月刊で発行した。編集を担当し、英文の『中国論談』の連絡員となっている。彼と党が連絡を回復するのは1937年にはいつてからである(邓加荣 121-122, 230-232, 234-237)。なお斯非知は陳翰笙と孫冶方の日本への渡航は、国民党による共産党狩りが過熱するなかで、日本に一時避難したのだとしている(斯非知 129)。しかし1934-35年に日本社会に触れたことや、日本語を勉強したことは注目される。

なお農村の経済調査は、中国の社会改革をどのように進めるかに係る問題であった(表3参照)。一方に中国の農村がすでに資本主義化しているという様々な主張があった。ソビエトロシアの経済学者たとえばマキエールは、文献的な調査からこうした主張を行い、それがコミンテルンによる中国革命の指導にも反映していた。1929年にコミンテルンから中国に対して出される、ただちに都市部の労働者を武装蜂起させて社会主義革命へという現実離れた筋書きは、実は、こうした分析を根拠にしていた。これに対して、半植民地半封建的状态にあるという含意は、半封建状態からの解放がまず必要である、土地改革によって貧農に土地を与えること=封建制度の消滅をまず行うべきだという主張につながる。言い換えると、中国革命においては、資本主義化のプロセス(新民主主義革命)が必要だという主張を裏付けることになる。したがって、陳翰笙が中心になって行われた



表 3 中国経済の分析：マキエールと陳翰笙の比較

マキエール（马季亚尔）	陳翰笙
アジア生産方式の存在を主張	アジア生産方式を否定 中国の発展はほかの国と変わらない
20世紀に資本主義生産方式が入り直ちに資本主義化	帝国主義の侵略が正常な発展を中断 半植民地半封建的状态

資料：邓加荣 214

表 4 日本経済の分析：講座派と労農派

労農派	講座派
19世紀末に資本主義に転換（ブルジョア市民革命は経験済み 労働者による社会主義革命で十分）	農業中心で半封建的（まずはブルジョア市民革命で大土地所有—小作人の支配服従関係を崩す）
経済権力の集中の分析に関心 独占資本主義であり帝国主義的 モスクワに対する知的独立	天皇制（封建的諸制度存続の証拠）に関心（コミンテルンは天皇制を攻撃）

資料：ローラ・ハイン『理性ある人々 力ある言葉』pp. 56-68；橋木俊詔『東京大学 エリート養成機関の盛衰』p. 146

農村経済調査は、中国革命や、革命のありかたをめぐる論争にも大きな影響を与えたと考えられている（cf. 邓加荣 210-217）。この議論は、日本資本主義の性格をめぐる、講座派と労農派の論争をたいてい思い出させるので、表 4 を作ってみたので、表 3 と比較されたい。

## 抗日文化活動 1937-1941

党との連絡が復活すると江蘇省の党委員会はまず学生の抗日救国運動に彼を配属した。間もなく 1937 年 8 月には日本軍が上海に侵攻する。1937 年 11 月には中国軍が上海から撤退。多くの共産党系の人士も上海を離れる中、残ったものはイギリス、フランスの租界に逃げた。日本軍の占領区に四方を囲まれた租界で抗日文化活動を行われたがその渦の中に孫治方もいた。多くの文化人の協力のもとに、公開あるいは秘密の出版や演劇活動

などを行った。このとき後年再び経済研究所で出会う顾准と初めて出会っている(抗戦が勃発する前、顾准(ゲー・ジュン 1915-1974)は江蘇省の委員会書記だったが、王明たちの左傾機会主義に対して、公開合法で政治色を薄めた宴会や娯楽活動などの形で宣伝団結を提案し、一部の同志の反感を買い書記職を取り上げられて、孙冶方が行っていた文化活動に配属替えになった。しかしこうして二人は協力して、租界の文化活動を進めている。邓加荣 266-283, esp. 266-270)。

なお1937年に孙冶方は読書会を通じて知り合った洪克平(ホン・クーピン 1906-2003)と結婚した。彼女は裕福な家庭に育ち、復旦大学教育学部を卒業、その後はミッションスクールで教鞭をとっていた。彼女の家族は結婚に反対したが、彼女は孙冶方の人柄に打たれて結婚の意志を貫いた。安定した収入のある彼女との結婚により、孙冶方の生活は大いに改善された(邓加荣 262-265; 斯非知 131)。

1940年当時江蘇省党委員会文委員会書記の孙冶方に対して、突然上級組織から重慶を経由して延安にきて、整風運動に参加せよとの通知があった。江蘇省党委員会は王明が支配。孙冶方の仕事ぶりは承知しているはずであった。延安で整風運動を管轄していたのは康生。康生から直接、孙冶方をトロッキー派としてみなしているとの発言を聞いたのは、上海で孙冶方とともに『中国農村』を編集していた薛暮桥。そこで康生に対して『中国農村』がトロッキー派と論争していたこと(つまり孙冶方はトロッキー派でないこと)を伝えたとされる。王明—康生が再び、整風運動を利用して孙冶方排除に乗り出したことは明らかだった(邓加荣 128-129)。

1940年9月に通知を受けてから、引継ぎなどをしてから出立。上海から香港を経由して重慶を目指したが、当時は日本軍が揚子江の通行を封鎖していたため、大回りして重慶にたどり着いたのは1941年1月に入っていた。しかし時間の経過とこの移動が状況を変化させた。当時、東南沿海各地は王明らが支配する長江局所管。しかし重慶を含む揚子江以南の奥地は周恩来が指導する南方局所管であった。加えて1941年1月皖南事変(移

動中の新四軍が国民党政府軍により壊滅的打撃をこうむった事件）もあり、延安までの道は閉ざされた。彼は周恩来を訪ねて指示を仰いだ。周恩来は、重慶にとどまって仕事をするを勧めた。ただ重慶には、中山大学時代の同窓の多くが大幹部として活動しており、仕事をする上でかえってそれが支障になるように感じられ、結局彼は上海に戻る決断をする（邓加荣 130-133）。

孫治方は戻る途中、香港に滞在したときに、1925年に共に上海からモスクワに行った劉少文と会ったが、この劉からも、香港にとどまって仕事をするを勧められた。そして間もなく、重慶の南方局から直ちに上海経由で苏北の新四軍軍部に赴任するように指示があった（邓加荣 133）。

#### 劉少奇との出会い 1941-1944

1941年6月 根拠地の鹽城（盐城）に赴いた孫治方は、まず華中局書記で新四軍政治委員の劉少奇に初めて面会するが、穏やかで親しげな面貌に、孫治方はただちに打ち解けた。そして華中局宣伝部での仕事を指示され、教育科長として黨員や幹部へのマルクスレーニン主義の教育をゆだねられる。劉少奇は、中国共産党の過去の挫折や失敗は、指導者の理論不足から、指導思想で誤りを犯したことにあると認識しており、華中局成立と同時に高級党校を設立、自ら校長に就任した。ここで孫治方に教育にあたらせたのである。学校といっても、小屋があるだけ、生徒は背囊の上に座り、膝の上の木の板が机がわりだった。そんな施設であったが、孫治方の気持ちは充実していた。反面、党内に充満する理論軽視の風潮のなかで、生徒たちが彼の話をもつかしいとか、面白くないとするのに困惑していた（邓加荣 134-136）。これは孫治方と一般の黨員では大きな学力差があったことが背景と思われる。ロシアのモスクワに5年居て外国語に堪能。その後の10年は上海にいて主として知識人と交流し、仕事をしてきた。そんな彼を再度奮い立たせたのは、劉少奇自身だった。

7月1日建党20周年記念の日の翌日2日、党校に現れた劉少奇は学生や孫冶方らを前に「党内論争を論ずる」という報告を行った。彼はまず党内論争は当然あるもので必要で激烈であっていいし、先鋭であるほどいいという。そうでないと、自由主義や調和主義に陥ってしまう。また同時に論争では自分は本当のボリシェビキ(=ロシア革命でレーニンを支持した多数派)であることを証明しなければならない。無原則に闘争する人は、闘争が好きで闘争のために闘争しているだけだ、と論じた(劉少奇“论党内论争”在《刘少奇选集上卷》178-217; 邓加荣 136-137)。孫冶方はこの話に心を動かされた。しかし、同時にロシアで経験したのと同様の理論軽視の傾向が、党校にもあることを心配せざるを得なかった。

7月13日孫冶方は劉少奇に教えを乞う手紙を出した。劉少奇はその日のうちに3,000字余りの返信を返している。この中で劉少奇は、中国共産党はその初期の陳独秀以後、理論を深く研究するよりは、実際闘争での鍛錬を強調するところがある。確かに英雄犠牲的精神で中国共産党は、世界にソ連共産党を除けば比類ないが、大きな弱点として、思想の準備、理論の修養の不足がある。中国共産党の過去のあまたの失敗は指導上の幼稚さや誤りがもたらしたもの。黨員が学校するべきは理論を深く把握することで生活の鍛錬ではない。理論研究に埋没することを「学院派」と呼ぶべきではない、理論を修養するには誰でも読んで研究する時期があるのだ。我が党の闘争経験は豊富だが理論に欠けている欠点はなお克服されていない、などと論じた(劉少奇“答宋亮同志”在《刘少奇选集上卷》219-241; 邓加荣 138-139)。この劉少奇の手紙は、孫冶方の理論と実践の間についての悩みを取り除き励ますものだった。

劉少奇はその後たびたび党校を訪れ講義を行った。孫冶方はその講義を学生とともに熱心に聴講したとされる。劉少奇の考えには民主の重視がある。中国はまだ資本主義を経験していないので、民主の伝統が不足しているともいい、民主の作風を培養することが、革命事業の発展に有利に働く

としている。孫治方が、劉少奇を尊敬した劉少奇から大きな影響を受けたことは間違いないだろう（以上の劉少奇との経過は文革後の1980年に孫治方が発表した論文が典拠である。そこで彼は劉少奇が中国はまだ資本主義を経験していないので、民主の伝統に欠けると述べたとしている。他说…我们没有经过资本主义社会阶段，缺乏民主。…由于资本主义生产的不发展…。除了缺乏社会主义的物质基础外，最重要的，就是缺乏民主传统。孫治方“重视理论提倡民主尊重科学—回忆刘少奇同志几次讲话”在《孙治方经济文选》249-258, esp. 253；邓加荣 139-141）。（以下、下線はすべて福光によるもの）この劉少奇の発言として、1980年に孫治方が言っていることは衝撃的で意味が深い。民主という伝統を育てるためには、資本主義の段階をしっかりと経由する必要があると、劉少奇が言っているように読めるからである（なお私見では劉少奇が「党内闘争を論じる」（1941）で実際に述べていることは少し違う。劉少奇によれば、中国は欧州のように資本主義の平和的発展の時期（その時期に社会民主主義が伸長した）がなかった。その中国に、社会民主主義を批判するレーニンの理論ややり方が持ち込まれたことで、悪い面として行きすぎた闘争、無原則な闘争の側面などが生じた。こうした正しくない闘争の結果、党内の民主生活は正常さを欠き極端な場合は欠乏している。刘少奇“论党内论争”在《刘少奇选集上卷》178-217, esp. 154, 199。しかし問題は1980年の孫治方の受け止め方である。彼孫治方自身が資本主義の発展がなかったことが、中国に民主主義が欠乏する理由になっていたと、思い至ったのではないか）。

なおこのように党内民主主義の重要性を説いた劉少奇は、第二次大戦後の新中国の建国の過程で、農村の社会主義化（合作化）を急ぎ過ぎないことを一貫して主張して、社会主義革命を急ぐ毛沢東と対立している（参照 福光「邓子恢について」）。また最終的には、国家主席の地位にありながら文化大革命で迫害を受けて権力を失い、1969年11月重体のなか十分な介護も得られないまま死に至っている（参照“文化大革命中”在《刘少奇自述》188-243, esp. 232-243）。

## 華中局から華東局へ 1944-1949

やがて時を経て劉少奇は華中局を離れ延安に移っている。そして整風運動のなかで、思想や履歴で曲折のあった党人を軒並み審査することが始まり、孫治方は1944年9月から1945年7月まで歴史審査を受けている。この方法というのは指定されている22件の整風文献にあてはめて自身を反省し、自己批判し、自身の精神改造をはかるというもの。孫治方は中山大学での一件に加えて帰国後6年にわたる離党が問題であった。幸いその審査の場所は華中局の中で、華中局では劉少奇により作風の改善が図られていた（薛暮桥は、1942年に、刘少奇同志の意見により、華中局は孫治方を名誉回復させていたとする（直到1942年，才按刘少奇同志的意见，由华中局为他平反）。《薛暮桥回忆录》305）。なにより最大の嫌疑であるトロッキー派かどうかにについては、農村経済問題の論争で顕著な成果をあげていたことが反証になった。こうして彼は歴史審査をパスした。このあと彼は経済学の理論を実践に生かそうと、財經部門への配属を希望し蘇皖（スーワン）地区政府貨物管理局総局副局長を担当。しかし1946年8月に国民党軍が蘇皖に侵攻したことでその政府機能は農村部に避難した（邓加荣 145-146）。

このとき彼は軍の司令部に配転された。そこで彼は華中局で平等主義的な土地分配政策がとられて、結果として自耕田であっても没収されていることを発見する。そこで現地の党委員会に対して、ただちに平等分割政策を停止、取り上げた自耕田はすべて返還することを文書で提言している。提言して2ヶ月、返事がないためさらに党委員会に文書を出し、最後は指導者に直言したとされる（邓加荣 150-154）。この経緯から（中央政府の方針とは違って現場では中農富農から土地の収奪が生じていたことがわかった）、孫治方の正しいと思ったことを通そうとする硬骨漢ぶり、事情が分かっている自分が主張せねばならないという正義感の強さが読み取れる。

1947年2月に華東局が成立すると、財經委員会に配属され、その後、

同委員会副秘書長、秘書長などを担当した。1947年末に華東局の第一回党代表大会が開かれたとき、生涯の宿敵といえる康生と初めて出会っている。このとき康生は、陳翰笙がコミンテルン直属の秘密黨員だという最高機密をなぜか、孫治方に伝えている。なお文革のあとに明らかになったのは、ロシアに残った孫治方の友人たちにトロッキスト（トロッキー派）の汚名をつけて逮捕に追いやったのは康生と王明だったことである（邓加荣 154-158）。なおその犠牲者の一人が、孫治方を党活動に導き、ともにロシアにわたった董亦湘である。董亦湘は1939年にロシアで逮捕され処刑されている（百度百科の董亦湘の解説を参照）。

## 上海から北京へ 1949-1957

1949年に上海が解放されると、孫治方は上海に移っている。中国経済の中心である上海で経済を管理する要職につくためである。しかしこの生活は長く続かなかった。1950年以降1954年までの間、長年の無理がたたって、かれは持病の肝臓病のため、たびたび入院治療を迫られたからである（療養については、その時の配属先の上海市長陳毅が配慮したとされる。驚くのは1954年に飛行機でロシアに行って療養していることだ。それまでの彼に対する扱いは異なり厚遇を受けたともいえよう）。そして1955年にかれは上海から北京に呼び出され中央政府に入る。できたばかりの国家統計局で、労働賃金や農村の統計を担当する副局長に就任する（邓加荣 287-292）。

1956年7月、孫治方はこの統計局の人員を率いて、ソビエトロシアの統計局を訪問している。ロシアの統計手法の経験を学ぶことが主たる目的である。公式の報告とは別に、スターリン批判直後のロシアで孫治方は個人崇拜と統計との関係を考察した。そして個人崇拜のもとでは指導者を喜ばせようとして数値が歪められたり、公開性や公正性が失われることに注目した（他知道，个人崇拜如果一旦侵蚀到统计领域，必然会使统计失去客观性，科学性，公开性和公正性，使统计失去了它应有的意义和作用……个人迷信造成了统

計畸形；統計的畸形又助长了个人迷信。没有民主，便没有统计的科学性和严肃性；没有科学的，严肃的统计，很容易损害到社会主义的到社会主义) (邓加荣 10)。

なおこの統計の問題に絡んで、1957年に彼は4つの論点を提起している。

- 1) 総生産価値の問題。品質とか、見た目の良し悪し、素材を価値に反映させる方法を問うている。
- 2) 不変価格の問題。コストや利潤、意図的に低い価格の問題を指摘して、価値と価格のかい離を指摘している。
- 3) 固定資産の償却。これを企業のコストに算入する必要を力説している。償却があまりに少なく更新が進まず、大修理になって無駄が生まれているとしている。
- 4) 利潤を企業管理の指標にすることで、企業がコストを意識し、労働生産性の引き上げにつながるとしている。

(以上4つの論点は1957年に発表された以下の論文に含まれている。孙冶方“从‘总产值’谈起”在《孙冶方经济文选》12-23；邓加荣 7-20)

斯非知は、孙冶方はこのロシアでの出張のときに、スターリンが亡くなったあとの経済政策の修正をみて、もともとソビエトロシアの経済政策に疑問をもっていたので、その修正に賛同したとしている(斯非知 173)。

なお正しい統計を作成するとか、統計情報を公開する問題については、のちに日本や米国を考察したあと、孙冶方は1980年の年末、全国統計局長会議での講演において、統計というものは資本主義の工業経済の発展に伴うもので、われわれはそうした発展段階を経ていないと述べている(我们缺乏资本主义发展阶段。统计本身是资本主义工业经济发展以后产生的一门学科。我们没有这个传统。……统计是资本主义时代的产物。)。孙冶方“关于加强统计工作和改革统计体制的问题”在《孙冶方全集第3卷》298 先ほどの民主の伝統の問題と似ている。ではこうした認識：民主も統計も必要だとして、それが資本主義の産物だという認識が正しいとして、社会主義国家中国は



これからどのような道をたどるべきだろうか。またどのような道ならたどることができるだろうか。それが問題である。

### 経済研究所所長としての奮闘から逮捕まで 1957-1968

ところで 1957 年に反右派闘争が開始されると、科学院経済研究所はこれに巻き込まれて、所長の狄超白（ディ・チャオベイ）、経済研究常務編集委員林里夫（リン・リーフ）など老闘士が極右分子だとして、排除された。47 歳の孫治方は、中央統計局副所長の職を離れて狄超白と交代した（価値規律第一解説詞）。

科学院経済研究所の前身は中央研究院社会研究所で民国時期は国民政府に直属する最高学術機構だったが、新中国になってからは中宣部に隷属していた。とくに優れている（出色）のは中国近代経済史だった。彼は科学院に手紙を書いて、研究所を中宣部から離脱させ統計局に帰属させることを求めた。また研究員の主たる研究を、世界経済史から現実の経済問題に、また研究方法についてもソ連的な枠組みからの離脱を求めた。なお彼は質的分析と計量分析の結合を重視して、鸟家培（ニアオ・チアベイ）や黄范章（ホアン・ファンチャン）を数学を学ばせるために科技大学に派遣している（価値規律第一解説詞）。

このとき彼の頭を占めていたのは、社会主義生産が抱える問題をいかに改善するかということであった。先ほど述べた固定資産の償却が不十分なのは、償却を進めて設備を更新しようにも、企業側に自主性が与えられず、償却すべき分も上納を迫られていることの反映であった。生産は品質、コスト、効率を考慮せず、ただ数量を追求していた。利潤は資産階級の思想だとして、ただ一定の利潤を稼げばよく、それを超えることも資本主義化になると指摘されていた（邓加荣 23-25；固定資産の償却問題は以下の 1963 年発表の論文で詳しく議論されている。孫治方“固定资产管理制度和社会主义再生产问题”在《孫治方经济文选》123-136, esp. 128-130）。こうした状態が異常で改

善を要するという判断力を失っていなかったともいえる。

これらの問題を、社会主義でも価値規律が守らなければならない、というテーゼに置きなおしたのが、彼の価値規律の議論だと私は考えている。まずここで価値とは労働価値説でのある商品の価値を指しており、その内実は社会的必要労働量である。価値が社会的必要労働量に収斂するというのが価値規律である。孫冶方は、価値規律を、市場競争を通して実現される規律と、商品や市場が存在しない社会での規律とにわけて、社会主義社会においては守らなければならないという意味での後者の規律であることを明確にしたのだと考えられる(1959年に発表された以下の論文を参照。孫冶方“论价值”在《孙冶方经济文选》31-65；邓加荣30-39；なおこの価値規律問題については薛暮桥の以下の解説がわかりやすい。薛暮桥“对价值规律的研究”在《薛暮桥回忆录》182-189)。ただそこで問題になるのは、社会主義という価格が市場で決定されない社会で、いかにして価値規律を実現するかである。そこで問題は、企業の自己管理権の問題と、利潤という管理指標の活用という次の問題に移ったと私は理解している(孫冶方の価値規律の論文を見ると、価値規律が社会主義社会で尊重されなければならないとしているが、その方法として商品経済：市場を持ち出しているわけではない。私見では価値規律という形で、市場があれば実現するはずの効率の実現(社会的必要労働量への収斂)を孫冶方は計画経済の枠の中で主張して、効率の改善を実現しようとしたと考える。しかし彼を批判する側は、計画経済の規律の上に価値規律を置くことは、社会主義の上に資本主義を置くことになると批判したのである。万军“邓孙冶方等人的经济学观点当做“反革命修正主义”进行“大批判””在《新中国经济学史纲(1949-2011)》83-88, esp. 83-84)。

1961年に発表した論文で、孫冶方は企業の自己管理権の問題を、所有権、占有権、経営管理権の関係が、社会主義ではどうなるかという形で提起している。社会主義経済のもとで、企業財産は国家が所有している(全民所有である)けれども、それを企業は占有している。では経営管理権は

どうなるのか。前提は各企業の独立予算（独立核算）制度。次の原則が大事としている。「大権は独立を保ち、小権は分散するように」（大権独攬，小権分散）「管理が過ぎて活発さが失われないように、元気が良すぎて乱れないように」（管而不死，活而不乱）。企業は単純再生産（简单再生产）の範囲では自己管理の小権を認められるべき（拡大再生産の範囲は国家の大権が厳格に管理するべき）で、さもなくば管理が行きすぎてしまう。単純再生産の範囲であれば国家は毎回それを審査する必要はない。現状は企業が固定資産の更新に責任を持たないことから、設備や技術の更新が進まないとしている（孫治方“关于全民所有制经济内部的财经体制问题”在《孫治方经济文选》66-74, esp. 66-70）。この議論を冒天启は企業権利拡張論（企业扩权论）と呼んでいる（冒天启（2008）10）。

最後に利潤指標の話。個別企業の管理を前提に議論を進めている。市場が死んでいても、個別の企業で利潤はたとえばコストを下げる努力をすれば増える。問題は社会主義社会において、利潤が増えることをどう理解すべきか。孫治方は社会主義社会において利潤は、拡大再生産そして公共需要のための財富であり、つまり利潤の本質が社会主義社会では（利潤とは労働者からの搾取である）資本主義社会とは変わったということを踏まえて、積極的に増やすべきだと主張する。また利潤や利潤率は、社会主義計画経済の主要指標として研究に値すると主張した。なお1963年に発表された以下の報告にはロシアの経済学者リーベルマンへの言及がある。問題にされることが分かっているながら、ソビエトロシアでのリーベルマンに言及することで、東欧の経済改革との連携をあえて示している（孫治方“社会主义计划经济管理体制中的利润指标”在《孫治方经济文选》136-142）。そしてこの1963年の報告はまさに敵に攻撃の口実を与えることになった。

孫治方が偉いのは、ここで戦いを続けたことである。1964年8月に雑誌『紅旗』編集部が開いた、経済研究所の楊堅白、張卓元らの「生産価格論」の一文に関する座談会。そこに孫治方も出席して意見を述べている。

このとき、孫治方は自分の指導下にある若い研究者の弁護をするため、あえて出席して発言したとされる。次の言葉はこのときのもの。「若い人たちをいじめないでください。この観点はわたしのものです。」(不要再批判他们了。他们文章所阐明的都是我的观点)。(伝えられるこの部分の中国語の表現はいろいろある。趣旨としてこのようなことを言ったということであろう。邓加荣 45-48；新望 185)しかしこの逃げずに敢然と反論する孫治方の態度は、逆に怒りを買ったのかもしれない。

そしてとうとう最後に1964年10月、中央宣伝部は70人の工作隊を研究所に送り込む。孫治方の反党行為を徹底的に暴(あば)くという口上である。これが翌年まで1年近く続いた。しかし孫治方は、価値規律や利潤についての主張を変えなかった。そして1965年9月、孫治方については党内職務の停止と、労働改造送りが伝えられる。罪状は1960年以来、研究所が受け入れていた張聞天と組んで反党行為を行ったというもの。このとき研究所在籍の顧准、駱耕漠、林里夫らも労働改造送りとなった。張聞天は元の職位(中央委員会総書記)の高さ(表5)から労働改造送りにならず、革命群衆による批判を引き続き受けることと、専用車など特権待遇の取り消しが通告された(邓加荣 48-55)。

まだ続きがある。文化大革命が始まると、中国経済学会最大の反革命分子孫治方は全人民で懲らしめるべきだということになり、1966年5月末、労働改造から呼び戻され、連日、群衆による批判集会に駆り出されることになった。暴力を受け引き回される、屈辱的な恰好や窮屈な姿勢で長時間

表5 中国共産党中央委員会総書記

陳独秀	1925/07-
向忠発	1928/06-
博古	1934/01-
張聞天	1935/01-

なお1945年6月から毛沢東が中央委員会主席になっている。

批判を受け続けることが2年近く続いたあとの1968年4月5日の夜、孫治方は突然逮捕され、秦城監獄の独房に閉じ込められた。同時に、家族はそれまでの住居をおいだされ、造反派が住居に乱入し日記やメモなどをすべて奪い去った。そして家族にはその後、収監先も生死も6年間明かさなかった（鄧加榮 56-68）。

### 独房7年 出獄してから死去までの7年 1968-1983

孫治方は、獄中で自説を曲げず孤独な闘いを続けた。この間に「社会主義経済学」の構想を毎月1編計85編を考え抜いたとされる（腹稿）。また1972年以降は罪を自白するとして紙を要求し、数編の論文を仕上げている（たとえば「私と経済学会の人々との論争について（我与经济学界一些人的争论）」など）（鄧加榮 159-170, 374；斯非知 282-284）。また獄に入って6年間は家族との音信も完全に絶たれた状態となった。これらの論文は、牢獄の不自由な環境のなかで、死を覚悟して、書き残したものといえるが、彼の強靱な意志と並外れた記憶力を証明もしている。

1975年4月10日、入獄後7年あまり経ったところで突然釈放された。この時、出迎えた軍人に対して、自分はなぜ牢に入れられたか、なぜ今釈放されるのか知らないと述べたうえで、私は志、職業、自身の観点を変えていないとした（我是一不改志，二不改性，三不改变自己的观点）。この発言は「三不改」と呼ばれている（鄧加榮 71-75）。

1977年のあと、中国社会科学院経済研究所顧問、名誉所長、中国社会科学院顧問、国务院経済研究所研究センター顧問、中国社会科学院経済研究所名誉所長などの職についた。

1979年の計委経済研究所と社会科学院経済研究所が経済学会無錫会議を挙行した時、研究者の心得として「五不怕」＝「批判を恐れず、職務取り消しを恐れず、党籍を失うことを恐れず、離婚を恐れず、死を恐れない（不怕受批评，不怕撤职，不怕开除党籍，不怕离婚，不怕杀头）」を提起している。

この時、薛暮橋は三不主義（揚げ足を取らない 弱みに付け込んで攻撃しない レッテル貼りをしない）（不抓辫子，不打棍子，不戴帽子）を述べ、それに答えて孫冶方が五不怕を述べたとされる（新望(2006)183）。この二人のやり取りされる内容には違和感が残る。というのは孫冶方が三不主義などはなくいいから答弁権が欲しいといったとされることがついつい思い出されるからだ（孫冶方…我不需要三不主义，只要有答辩权，允许我反批判就行）。（参照 王元化(2009)）。

1979年9月に検査で北京医院に入院した時に、肝癌が進行していることがわかる。経済研究所では、孫冶方の腹稿を救出するべく、チームをやって口述記録をとった。しかし孫冶方の「社会主義経済学」は生前完成を見るに至らなかった（しかし1998年に刊行された孫冶方全集の第4巻は「社会主義経済論論稿」と題して4本の原稿を収めて全365ページ。また第5巻は社会主義経済学大綱が270ページあって、さらに100ページの大事記もある。彼の社会主義経済学は未完成といえれば未完成であるが、死後20年近い時間をかけて関係者により、よくまとめる努力が果たされたともいえるのではないか）。

1982年9月、彼は病の中、中共第十二回全国代表大会に出席。中共中央顧問委員会委員に選ばれた。同年12月16日、孫冶方を顕彰し学ぶために、中共社会科学院機関党委は、彼に模範共産党員の称号を授与することを決定した（彼は人生最後の局面で、一歩進んだ市場主義者に自身の思想を飛躍させることはなかったが、長く病室にあったことからこれは致し方ないと私には思える。1982年に計画経済を主として市場調節を補とするという論稿、つまり社会主義経済を堅持する立場の論説を病室の中で2本書いている。参照 孫冶方全集第3巻401-402, 450-453）。

1983年2月22日 孫冶方は北京で亡くなった。享年75歳。遺灰は故郷の太湖に運ばれ遺言に従い散骨された。前年の12月9日に最後の力を振り絞って自署した遺言は有名である。「私が死んだら私の体を病院に渡して医学解剖すること。告別儀式は行わず、遺灰を残さず、追悼会は行わ

ないこと。ただし研究所の昔からの同僚が、私の経済学の観点について、評論会あるいは批判会を一度行うことは反対しない。皆が正しいと思うところは、宣伝して広めて欲しい。同時に一面的あるいはこれは間違いだと言うところは、世の中を誤らせないために、遠慮なく批判を加えることを希望する。」（但不反对经济所的老同事，对我的经济学的观点，举行一次评论会或批判会，对于大家认为正确的观点，希望广为宣传；但同时对于那些片面的，以至错误的观点，也希望不客气地加以批判，以免贻误社会。）（邓加荣 353, 379）

#### 参考文献

##### 中国語資料（刊行年順）

- 刘少奇《刘少奇选集上卷》人民出版社，1981
- 孙冶方《孙冶方全集全五卷》山西经济出版社，1998
- 邓加荣《登上世纪坛的学者 孙冶方》中国金融出版社，2006
- 薛暮桥《薛暮桥回忆录》天津人民出版社，2006
- 新望“改革年代里的兄弟经济学家—近看孙冶方与薛暮桥”在《百年沧桑一代宗师》中国发展出版社，2006, 179-188
- 冒天启“重新解读孙冶方经济学思想”在《经济研究》2008年第10期，8-12
- 王元化“回忆孙冶方同志二三事”人民政协网，2009/01/15  
(<http://www.rmzxb.com.cn>)
- 中共中央文献研究室第二编研部编《刘少奇自述》国际文化出版公司，2009
- 孙冶方《孙冶方经济文选》中国时代经济出版社，2010
- 顾准《顾准经济文选》中国时代经济出版社，2011
- 斯非知《中国经济学界奇异的双子星 薛明剑，孙冶方兄弟评传》上海三联书店，2011
- 《价值规律第一 孙冶方》凤凰视频 v. ifeng.com 2011/02/12（映像最終確認 2017/03/13）
- 张卓元 等著《新中国经济学史纲（1949-2011）》中国社会科学出版社，2012
- 中央党史研究室张闻天选集传记组《张闻天文集第四卷 1948-1974 修订版》中央党史出版社，2012

##### 日本語資料（刊行年順）

劉少奇 浅川謙次・尾崎庄太郎編訳『劉少奇主要著作集 全4巻』三一書房，

1959-1960

- E・リーベルマン「計画・利潤・報奨金」(ブラウダ紙1962年9月9日より翻訳)『社会主義政治経済研究所研究資料』第6巻第12号, 1962年12月, 5-12
- 鈴木肇「リーベルマン理論の理解のために」『世界経済評論』第10巻第4号, 1966年4月, 35-41
- 横山宏「中国における利潤論争」安藤彦太郎編『文化大革命の研究』亜紀書房, 1968年, 115-126
- ブハーリン 和田敏雄・辻義昌訳『ブハーリン著作集2「経済学者の手記」ほか』現代思潮社, 1970
- 上島武「ネップはいつ終わったか—ソ連過渡期経済の研究—10—」『大阪経大論集』第95号, 1973/01, 45-74
- 下斗米伸夫「ブハーリン復権運動の歴史的意味」『朝日ジャーナル』1978/11/24, 27-32
- スティーヴン・F・コーエン 塩川伸明訳『ブハーリンとボリシェビキ革命——政治的伝記 1888—1938年——』未来社, 1979
- 小山洋司「ブハーリン再評価の試み—スティーヴン・F・コーエン『ブハーリンとボリシェビキ革命, 政治的伝記: 1888-1938』を読んで」『高知論叢』第11号, 1981/03, 137-148
- 浜勝彦「中国経済改革の旗手・孫治方の生涯」『アジア経済旬報』1274号, 1983/10/11, 1-3
- 張揚「黄金の品格 著名な経済学者孫治方について(上)」『アジア経済旬報』1274号, 1983/10/11, 4-22
- 張揚「黄金の品格 著名な経済学者孫治方について(下)」『アジア経済旬報』1275号, 1983/10/21, 1-19
- 松野昭二「董輔弼「孫治方の社会主義経済論を論ず」(1983年11月 武漢大学出版社)」『立命館経済学』第33巻第3号, 1984年8月, 105-136 (425-456)
- 山野勝由「ブハーリンの復権」『レファレンス』第460号, 1989年5月, 1-25
- 中兼和津次「市場体制への移行—比較体制論的考察」同著『中国経済発展論』有斐閣, 1999年, 199-232
- 中兼和津次「中国における移行政策の展開」同著『経済発展と体制移行』名古屋大学出版会, 2002年, 124-165
- 伊藤誠「社会主義市場経済の理論的可能性と中国の進路」『東京経大会誌』第233号, 2003年2月, 25-44
- 関志雄『中国を動かす経済学者たち』東洋経済新報社, 2007



中国経済学の父 孫治方（スン・イエファン 1908-1983）

ローラ・ハイン 大島かおり訳『理性ある人びと 力ある言葉 大内兵衛グループの思想と行動』岩波書店，2007

橘木俊詔『東京大学 エリート養成機関の盛衰』岩波書店，2009

福光寛「中国経済の過去と現在—市場化に向けた議論の生成と展開—」『立命館経済学』第64巻第5号，2016年3月，194-222

福光寛「鳥籠理論そして陳雲（チェン・ユン 1905-1995）について」『成城大学経済研究』第214号，2016年12月，37-72

福光寛「中国の経済学者 馬寅初（マー・インチュ 1882-1982）について」『社会イノベーション研究』第12巻第1号，2017年2月，273-298

福光寛「農業政策で主張を堅持 鄧子恢（トン・ツーホイ 1896-1972）について」『成城大学経済研究』次号（第218号）投稿予定

著者は、成城大学特別研究助成、成城大学経済研究所第二プロジェクト、文部科学省私立大学研究ブランディング事業、以上3つの研究プロジェクトに属している。小稿はその研究成果の一部である（著者連絡先：[fukumitu@seijo.ac.jp](mailto:fukumitu@seijo.ac.jp)）。